



浜田病院での無痛分娩をお考えの方に

1. 無痛分娩とは

無痛分娩とは、鎮痛剤を使用して痛みを和らげながら出産する方法です。

出産の痛みの軽減そのものが無痛分娩の第一の利点です。

その他に、取り乱さずに落ち着いて出産できること、体力を温存しながら出産できることが利点としてあげられます。

当院では硬膜外麻酔という麻酔方法を用いた無痛分娩を行います。麻酔の効果が現れる範囲はおなか・腰から足に限られます。全身麻酔ではありませんので、はっきりと目が覚めた状態で出産することが可能です。

使用する麻酔薬の量は非常に少なく、薬剤が赤ちゃんに直接影響を与える心配はほとんどありません。無痛分娩は出産の痛みを軽減しますが、痛みが完全になくなるわけではありません（和痛出産という表現が実情に近い表現です）。

これは痛みの感じ方には個人差が大きく、チューブからの薬剤の広がり方も人によって異なるためです。痛みが強い場合は、安全な範囲で麻酔薬を調節します。

2. 当院の無痛分娩の特徴

- ① 事前に日程を決めて計画出産(誘発分娩)を日中に行います。
- ② 麻酔に関する処置は産科医師が行います。

3. 当院で無痛分娩可能な方

- ① 経産婦の方
- ② 妊娠前のBMIが25未満の方
- ③ 妊娠32週までに主治医へ無痛分娩希望を相談され予約できた方

4. 無痛分娩が行えないとき

無痛分娩を希望された妊婦さんでも、以下の場合には硬膜外麻酔が行えません。

穿刺困難(姿勢の保持困難・脊椎の変形や手術歴があるなど)
止血凝固異常(抗凝固薬使用中、検査値の異常)
穿刺部位(背中・腰)の感染、全身性の感染
神経変性疾患
その他(医師が不適切と判断した場合)

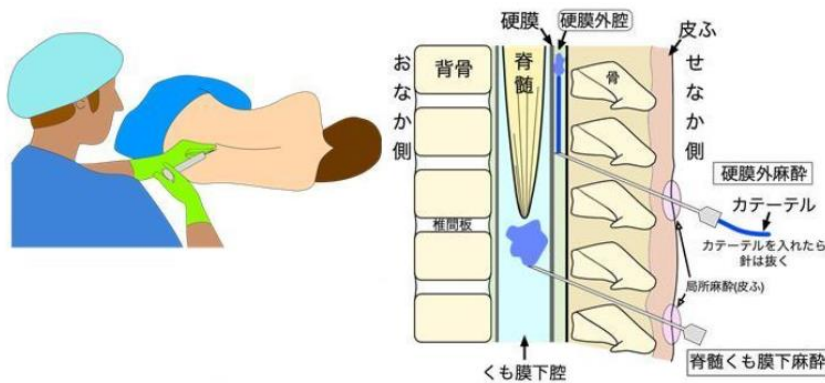
5. 麻酔方法

当院では硬膜外麻酔を実施しています。

硬膜外麻酔とは背骨の中にある脊髄（背中の中を通る太い神経）を囲う硬膜の外側

（硬膜外腔）に、細いチューブを留置します。チューブはテープで背中に固定します。

チューブから麻酔薬を投与し痛みを和らげます。



処置中は横になり、背中を丸めた姿勢をとってもらいます。

この姿勢がしっかりとれると、処置が行いやすくなります。逆に、姿勢がうまく取れないと、処置に時間がかかったり行えない場合があります。

針を刺す前に背中を消毒し、細い針で局所麻酔を行います。麻酔のチューブを入れる処置を行っている最中は危険ですので動かないようにしてください。

また、足や腰に痺れるような痛みがある場合は教えてください。

6. 無痛分娩の実際

- ① 無痛分娩を希望することを、妊婦健診の際に担当医師に伝え説明を受けます。
- ② 無痛分娩の予約をします。
- ③ 35週までに担当医師より無痛分娩の説明を受けます。36週頃に助産外来(無料)で助産師より無痛分娩の説明を受けます。医師と助産師の説明を十分に理解されたうえで同意書に署名し入院時に持参してください
- ④ 計画分娩の日程に合わせて前日入院をします。
- ⑤ 誘発分娩を開始と同時にチューブを挿入しておきます。
- ⑥ 有効な陣痛を確認後、準備していたチューブより麻酔を開始します。
- ⑦ 麻酔薬を注入してから陣痛の痛みが軽くなるまでに20～30分程度かかります。
- ⑧ 麻酔薬が効いている間は、足に力が入りにくくなることがあります。転倒などの危険を防止するために、無痛分娩中の歩行は控えてもらいます。また麻酔の影響で排尿困難になることがあります。必要に応じて尿道に細い管を入れて導尿します。
- ⑨ 重大な合併症が起こった時に人工呼吸が必要となる場合があります。人工呼吸の際に嘔吐し誤嚥してしまうと危険なため、無痛分娩を開始した後は絶食で飲水はクリアウォーター(水・お茶・スポーツドリンク)のみになります。
- ⑩ 出産後、分娩に関する処置がすべて終われば、麻酔薬の注入を中止しチューブを抜きます。

7. 無痛分娩の合併症

硬膜外麻酔による無痛分娩は、多くの妊婦さんにとって安全に行うことができます。

しかし、以下に示す合併症や、その他の合併症が起こることがあります。

合併症が起こった場合には適切に対応しますが、入院期間の延長、高次医療機関(総合病院)への搬送、手術などの治療を要することがあります。

- ① **低血圧**：麻酔の効果によって、母体の血圧はいくらか低下します。低血圧の程度によっては、嘔気や嘔吐、胎児の一過性徐脈(脈拍が下がる状態)が起こります。血圧を上げる薬で速やかに対処することが可能です。低血圧の予防のために、麻酔前に点滴を行います。
- ② **分娩中の発熱**：無痛分娩中には、無痛分娩を行わない場合にくらべて母体の発熱が起こりやすくなります。
- ③ **頭痛**：麻酔が原因で頭痛起こることがあります。
麻酔が原因の頭痛の多くは数日～1週間で軽快します。
- ④ **背部痛**：針を刺した部位の痛みがしばらく気になることがあります。
まれに背中に感染がおこり、腫れや痛みを起こすことがあります。
- ⑤ **アレルギー**：麻酔に用いる薬剤に対するアレルギーが起こることがあります。
重症のアレルギーはまれですが、起こった場合には救急対応を要します。
- ⑥ **硬膜外腔の感染や血腫**：約10万人に1人と非常にまれにしか起こらない合併症です。感染による膿瘍や血腫が脊椎を圧迫すると足のしびれや麻痺を起こすことがあり、手術などの緊急治療を要します。
- ⑦ **一時的なしびれや麻痺**：出産によって骨盤を通る神経が圧迫され、一時的に排尿を行うことが難しくなることや、足のしびれや感覚の鈍さを感じるがあります。
通常は短期間で軽快しますが、まれに症状が数か月続くこともあります。
- ⑧ **全脊椎麻酔**：チューブが硬膜の中に入り、硬膜の中に麻酔薬が過剰に入ると全脊椎麻酔となり、意識消失や呼吸停止が起こります。薬液のテスト注入によって、硬膜外の適切な位置にチューブが入っていることを確認し、全脊椎麻酔が起こらないようにしています。万が一、全脊椎麻酔となった場合には、麻酔の効果が切れるまで人工呼吸などの集中治療を行います。
- ⑨ **局所麻酔薬中毒**：硬膜外チューブが血管内にはいることがまれにあります。局所麻酔薬が血管内に直接投与されると、耳鳴り、金属味、口周囲の違和感、意識レベルの変化、痙攣などが起こり全身管理を必要とします。局所麻酔薬は少量ずつ投与します。

8. 分娩への影響

無痛分娩では痛みが和らぐとともに、陣痛微弱(陣痛が弱くなる)になることがあります。このため、無痛分娩を行わない場合と比べると、分娩所要時間は長くなり、陣痛促進剤の使用と吸引分娩・鉗子分娩の頻度が上がります。分娩中に発熱が起こると、抗菌薬が必要になることがあります。無痛分娩をしないときと比べて帝王切開となる頻度は変わりません。また、麻酔のために、うまくいきめなくなることがあります。陣痛を感じずいきむタイミングが難しい場合や力が入りづらい場合には、うまくいきめるように麻酔薬を調節することがあります。

9. 費用 ※費用の詳細は受診時にお尋ねください。

無痛分娩は保険診療範囲外ですので、自費診療になります。

費用は以下の通りです。

無痛分娩の準備を行ったが、日中に分娩に至らなかった場合：2～5万円(税別)

無痛分娩の準備を行いなおかつ、分娩に至った場合：12～15万円(税別)

10. 予約枠

当院では安全に無痛分娩が行えるよう、予約枠の数を制限させていただいております。

詳しくはスタッフにお尋ねください。

